



Humanity & Nature Newsletter

No.20
June 2009

地球研ニュース



薪木を積み、家路を急ぐロジの男性。ザンベジ川上流域のバロツェ氾濫原(ザンビア西部州)では、丸木舟が重要な交通手段である。丸木舟をうまく漕ぐことは、彼らのエスニックなアイデンティティの源泉になっている(撮影:岡本雅博)

今号の内容

P2

特集1●領域プログラムを語る

〈循環領域プログラム〉

自然と人間の関係性を踏まえた
循環の理想型を探る

谷口真人+花松泰倫

P4

特集2●プロジェクトリーダーに迫る!

生活環境の厳しい地域で
生活習慣病がなぜ頻発するのか
奥宮清人×遠藤崇浩

P6

特集3●地域セミナーを終えて

〈大阪〉第4回地球研地域セミナー

災害と『しのぎの技』

—池島・福万寺遺跡が語る農業と環境の関係史

島島をキーワードに、災害と環境、
人の営みの歴史を読み解く

塚本浩司×木村栄美×鞍田 崇

〈沖縄〉第5回地球研地域セミナー

やんばるに生きる—自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光

持続可能な観光には、発地型から
着地型への発想の転換が欠かせない

花井正光×島袋正敏×瀬尾明弘×
湯本貴和

P10

特集4●2009年度新規PR(プレリサーチ)紹介

都市と地球環境を結ぶ—「環境・経済・社会」
の三つの成熟都市の実現のために

村松 伸

P11

■ 地球研こらむ —時事問題と研究関心

人文学と地球環境学 木下鉄矢

P12

■ 前略 地球研殿 —関係者からの応援メッセージ

経験を重視する「知」の地球環境学を
中西正己

P13

■ 所員紹介 —私の考える地球環境問題と未来

「足らぬを知る」楽しさ 細谷 葵

P14

■ お知らせ

イベントの報告、出版物紹介、
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、
2009年度新FS・IS紹介、研究活動の動向、イベント情報

自然と人間の関係性を踏まえた循環の理想型を探る

話し手●**谷口真人**(循環領域プログラム・プログラム主幹) + 聞き手●**花松泰倫**(地球研プロジェクト研究員)

地球環境問題を「循環」という切り口から考える「循環領域プログラム」。地球研が目指す「循環」の概念とは何なのか。どのような姿の地球をめざすべきなのか。谷口真人プログラム主幹に伺った。

循環領域プログラムというのは、どういった性格のものなのでしょうか。

地球上では、水や大気などの物質やエネルギーが循環しています。私たち人間も、いろいろなモノをさまざまなかたちで消費して、廃棄するというモノの流れのなかで暮らしています。このような循環、あるいはモノの流れのメカニズムやプロセスを明らかにすることが「循環領域プログラム」の目的です。

物質の循環やモノの流れが急激に変わることによって引き起こされる地球環境問題が、その根底にある大きな課題です。その意味で、循環が変わることが地球環境問題の根本的原因の一つだという認識がベースにあります。地球研のミッションの一つに「循環」がプログラムとして入っている理由がここにあると理解しています。

そうすると、自然が本来そなえている循環プロセスに人間の側が合わせていくことを目論んでいるのでしょうか。

いえ、厳密にはそうではありません。人間と自然の双方が循環プロセスに関与しています。したがって、自然の循環システムがどうなっているかを明らかにすることも大事です。しかし、人間の影響がこれだけ大きくなってしまっているわけですから、自然がもっている循環システムに人間側の行動を合わせるということでの対応は難しい。むしろ、人間活動あるいは人間と自然との関係性を踏まえた理想的な循環システムを見つけるほうが重要だと、私は考えています。

◎空間軸と時間軸を跨いだ循環を考える

自然に対して人間が強く働きかけることで、自然の循環システムが地球レベル



ハルビン市を流れる松花河。中露国境でアムール川と合流し、内陸の物質を遠くオホーツク海まで運び込む(撮影:花松泰倫)

で変化しつつあることはみなさんが理解しています。そういうなかで、人間と自然とがどういう折り合いをつけるかを見つけてだすことが課題です。人間の自然への作用が反作用として返ってくるのですから、人間と自然の相互作用も一種の循環だと言えます。

「循環」と言っても漠然としていて、捉えどころがないようにも思えるのですが。

確かに、循環という概念の輪郭はボヤッとしてますね。(笑) でも逆に言えば、私たちは、循環というものを理解しているようで、あまりわかっていないのではないとも言えます。一部の物質のフローであったり、周期であったり、変動くらいしか理解していないのではないのか。そういうもののたくさんの部分がすべてつながって大きな循環システムを形成していることは、みなさんもイメージとして理解されていると思うのですが……。

循環のプロセスは百年、千年という長いスパンで起こっています。大事なこと

は、そのことを頭に入れたうえで、短いスパンで起こるフローや周期とその変動を、長いスパンの循環のなかで捉えることだと思います。

循環にもさまざまなスケールのもがありますよね。

循環の大きさと言っても、空間的な大きさと、時間的な大きさがあります。私たちが目指しているのは、空間と時間を跨いだ循環です。空間軸と時間軸を別個に考えていては、地球環境問題は絶対にうまく理解できない。その両方を跨いだ思考が必要です。

◎循環を螺旋階段のイメージで捉える

たとえば、私がリーダーを務める研究プロジェクトの地下水の話で言うと、循環するのに数百年とか数千年かかっています。しかも、遠いところで涵養された水が流れてきていますから、いま使っている地下水は1,000年前に遠くで降った

現行の循環領域プログラム

- C-04 北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価
- C-05 都市の地下環境に残る人間活動の影響
- C-06 病原生物と人間の相互作用環境
- C-07 温暖化するシベリアの自然と人
——水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応

編集●花松泰倫

たにぐち・まこと(右)
地球研教授。専門は水文学。研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」プロジェクトリーダー。二〇〇八年から現職。
はなまつ・やすのり
専門は国際法。研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響」プロジェクト研究員。二〇〇八年から現職。



雨の資産であつたりします。こんなにゆっくり循環する水を無造作に使っているようでは、1,000年後には使えなくなることです。空間と時間の両方の要素を取り入れた循環の望ましいあり方を考える必要があるということです。

他方で、「循環型社会」という言葉が一般に流布しています。地球研が目指すプログラムとしての「循環」とはどう違うのでしょうか。

「循環型社会研究」といわれる領域があつて、どうすれば循環型社会を形成できるかが議論されています。議論されているのは、3R(recycle, reuse, reduce)。つまり、社会システムのなかで資源をどれだけ何度も有効に利用できるか、廃棄物をどれだけ少なくするかを考えることが基本です。

この研究には問題もあります。循環型社会とは言つても、どこから資源をもってくるかとか、どこにどれだけ廃棄すべきかという視点が欠けていることです。この部分がもっと重要であるのに、十分に議論されない傾向にあるように思います。先ほどの問題を含めた循環を考えないとダメだと思うのですが、どちらかというところ「3Rを増やしましょう」という議論に止まってしまう。モノやエネルギーまでも、すべて100%リサイクルできるかのようなイメージで議論している。これはまずいと思いますよ。

循環は必ずしも閉鎖的ではないということです。

実際にグルグルと循環していても、それが前と同じに戻るかというと、そうではない。必ずしも同じ地点に戻ってくるわけではないのです。水にしても、循環しているとは言つても、もともとあった水と同じ状態に戻っているわけではなくて、「履歴を背負った水」が戻ってくるといのが正確な表現でしょうね。

循環というのはスパイラル、螺旋階段のようなイメージで理解してください。

螺旋階段と言われると、悪循環をイメージしてしまいます。(笑)

螺旋階段を上る好循環のイメージをもつ人と、階段を転げ落ちる悪循環のイメージをもつ人とがありますね。(笑)

◎悪循環を好循環へと置き換える

私には、人間というのは同じ経験をするとその経験を次に賢く生かしているはずだ、あるいはそうあつて欲しいという気持ちがあります。スパイラルの捉え方も、経験を積んだぶん高く上がるというイメージです。自然と人間とが共生する地球創造にむけて、螺旋階段を一步步上がるイメージで悪循環を好循環に転換する研究努力が必要です。

今年10月に地球研が開催する第4回地球研国際シンポジウムでは、「境界のジレンマ」と題して、人間文化をかたちづけてきた各種の境界の問題を、水と物質の循環の観点から取りあげます。厳密には循環領域プログラムのシンポジウムではないのですが、私に関わる地下環境プロジェクトと白岩孝行さんのアムール・オホーツクプロジェクトとが合同で企画します。循環領域プログラムとしての成果も、この機会に出せるのではないかと考えています。

どういったシンポジウムを企画されているのか、その一端を聞かせてください。

水とその中に溶けた物質の流れは、本来シームレスにつながっているはずですね。ところが、自然科学の分野では、海洋学、水文学、気象学などと、それぞれ別個の学問分野がアプローチしてきたために、その間のつながりや循環プロセスの全容が理解されていないという問題があると考えています。この

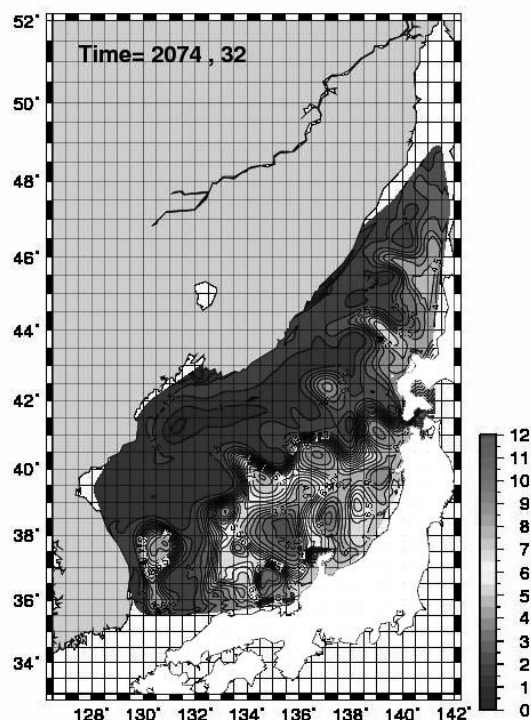
ディシプリンの境界を越えるかたちで、循環の全体像を理解することを試みます。

私のところは、地表水と地下水とのつながりにスポットをあてます。白岩さんのところでは、鉄による陸と海とのつながりを取りあげることになるでしょうね。

その一方で、人間社会の営みは文化圏や国境、さらには縦割り行政などのさまざまな人為的境界によって水や物質の流れを分断してきました。もちろん、そのような境界にも歴史的理由があつて、必ずしも悪というわけではないし、メリットもあるかもしれません。そういうことも踏まえたうえで、人間と自然とがうまく折り合えるような水と物質の循環システムを考えたいと思っています。

その際に、従来は陸地だけを対象にしてきた「流域」概念を拡張して、新しい概念の構築をめざしています。ここでも、螺旋階段を一步步上がった「流域」概念を出せたらと願っています。

2009年4月3日 地球研「はなれ」にて



コンピュータシミュレーションによる日本海200m深における水温図(11月を想定)
文化圏や国境を越えて循環する水をとおり新しい概念構築をめざす(作成者: 中田聡史)

生活環境の厳しい地域で生活習慣病がなぜ頻発するのか

研究プロジェクト「人の生老病死と高所環境——『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」〈多様性領域プログラム〉

話し手●奥宮清人(地球研准教授)×聞き手●遠藤崇浩(地球研助教)

編集●遠藤崇浩

病気は個人の体質によって発症するものとは言い切れない。自然環境はそこに暮らす人びとの体内にそれぞれの「内なる環境」をつくっている。異質な「外なる環境」が持ち込まれると、その「せめぎあい」は疾病を引き起こす。

遠藤●地球研に初めて着任したとき、多様な専門分野の研究者がいることにびっくりしたのですが、奥宮さんのようにお医者さんまでいることを知って、なおのこと驚きました。(笑)

奥宮さんがプロジェクトを立ち上げるに至った経緯からまず教えていただけますか？

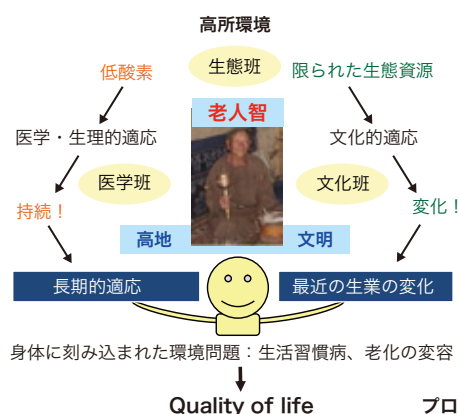
◎高所プロジェクトの発想の原点

奥宮●私はこれまで「フィールド医学」という新しい分野で働いてきました。普通、体の具合が悪くなると、患者はお医者さんを訪ねますね。医者はその場を動かずに患者を診るわけで、これは「臨床医学」とよばれます。

これにたいして我々の手法は、「臨地医学」とも「フィールド医学」ともよばれるもので、医者は自ら現場に出向いて住民の健康状態を診ることが特徴です。

遠藤●いわば「行動するお医者さん」ですね。これまでどのようなフィールドに出かけてこられたのですか？

奥宮●私の当初の関心は「長寿の秘訣」。環境や文化の異なる地域に暮らす高齢者の実態と長寿の関係を見たいと、世界各地の長寿村を調査してきました。



最初の調査地のパキスタンのフンザは印象的でした。ここは高地にあって、長寿村と言われていたのですが、ほんとうに長寿なのか、事実ならばその理由はなにかを調べることが目的でした。

また、高知県旧香北町や土佐町の高齢者と比較しながら、東南アジアのラオスやインドネシアなどの高齢者の暮らしぶりと病気との関係を調べました。

こうした調査を通じて意外な発見がありました。伝統的な農村部でありながら、糖尿病・高血圧・肥満などの生活習慣病の症例を数多く観察したことです。

遠藤●そうした病気は「ぜいたく病」ともよばれますね。

奥宮●そうなんです。伝統的な農村では生活習慣病は少ないと考えるのが普通です。ところが、実際には低所得層に糖尿病患者が多かったりする。なぜこうした事態が発生するのか、素朴な疑問が起こりますよね。これが現在の研究プロジェクトの奥底を流れる疑問です。

◎「適応」の完成度が高いがゆえに脆弱さを増す

遠藤●奥宮さんの研究は「高所環境プロジェクト」と銘打っていますね。高所環境に注目しつつ、農村での生活習慣病の発生の疑問に答えようとする理由は？

奥宮●私が高所環境にこだわるのは、先ほど述べたような直観に反するような病理現象は高地においてこそよく観察されるのではないかと考えるからです。生活習慣病が生活環境の厳しい地域で発見されたら、それはそれで注目を浴びます。けれども、それだとどんな環境の極地でもよいことになります。

ところが、高地には低酸素という他の極地にはない特徴があります。そういう環境に体を適応させたがゆえに、そこに暮らす人たちの体は、我々よりも外部環境の変化に脆弱である可能性があります。伝統的な農村と生活習慣病とのミス

マッチがより明確に観察できるのですね。

遠藤●高地のきれいな空気を吸っている人は体も丈夫そうに思うのですが……。

奥宮●それは違います。高地の特徴は二つあります。一つは低酸素、もう一つは乏しい生態資源。暮らすには厳しい環境です。それでも、そこで長年住んできたというのは、身体的あるいは文化的に適応してきた証拠です。

近年のグローバリゼーションの進行は、高所の生業や生活様式にまで変化を及ぼし、そのことが環境に適応させつつ構築した自然利用の伝統的システムの破綻をまねいています。その破綻が、ひいては人間の身体に戻って現れるのが生活習慣病だと、私は思っています。

遠藤●グローバリゼーションが高地にまで及ぶというのは、たとえば甘味料の入った炭酸飲料やスナック菓子、脂肪分の多い食事など、その地域に従来は存在しなかったモノが流れ込むなどの現象も含むのですね。こうした食生活に慣れていない人たちには体がついていかない。その結果が生活習慣病というかたちをとって観察されるのですね。

奥宮●そうです。ですから、そういうライフスタイルの変化の背景にある土地利用と農牧複合の変化、都市部への人の移動などの影響を調べる必要があります。

◎「身体的適応」と「文化的適応」という二つの側面

奥宮●「適応」という言葉は我々のプロジェクトのキーワードですが、これには二つの側面があります。一つは身体的なもの。同じ高所に暮らしているといっても、アンデス、チベット、エチオピアに暮らす住民はそれぞれに違う体質を形成しつつ高所環境に適応していますね。たとえば、赤血球の働きを良くするよう体質を適応させている。

酸素を運ぶトラックに赤血球を喩えると、アンデスの人は赤血球の多い体質に



チベット人高齢者(91歳男性)。酸素分圧は96%と良好だが、高血圧(161/93)、視力障害(白内障、角膜瘢痕)、聴力消失、外反母趾、四肢筋肉の廃用性萎縮あり、現在、ラダック・レー(標高3,500m)にある難民村の老人施設で介護を受けながら、食事摂取やトイレ歩行は何とか自力でできている。診察中も、オンマニベムのお祈りの言葉をずっと唱えていた。1959年にチベット高原より亡命し、小作、羊飼い、肉体労働を行いながら、苦勞した生活がうかがわれる。難民村には42人の高齢者が暮らしていた

変化することで、つまりトラックの数を増やすことで高所環境に順応してきました。しかし、その副作用として血流が悪くなる慢性高山病が生じやすくなっています。いわば交通渋滞ですね。

他方、チベットの人たちは赤血球の数よりも、血流を増やすことで対応しています。トラックの数はそのままにして、輸送スピードを上げるわけです。エチオピアの人たちはというと、血液に含まれる酸素の濃度を低地にいる場合と同様に高く保たれるようになっている。

どうしてこういう体質になったのか、理由はよくわかっていないのですが……。遠藤●おもしろいなあ。環境問題もちろんですが、そうした医学的な研究もどんどん進めてほしいですね。それが研究の新しい突破口になるかもしれません。

それはそうと、もう一つの側面というのはどういうものですか。

奥宮●我々が「文化的適応」とよんでいるものです。先ほども述べましたように、高所では空気は薄いし、資源もありません。こうした厳しい条件のもとで生きるには、自然資源の利用方法、人的なネットワーク、共同体のもめごとを解決する手法などにおいて、さまざまな仕組みが必要です。

そうはいうものの、身体的適応と違って、世界各地の高所に、どのような文化的適応についての共通点があるのか、ど

のような違いがあるのかはよくわかっていない。この違いを明らかにしながら、我々の提唱する「高地文明」の仕組みを考えることも、プロジェクトの大きな課題であると考えています。

遠藤●整理すると、高所環境プロジェクトの目的は、たとえば糖尿病が少ないと考えられてきた高地の伝統的な農村に暮らす人びとのあいだに生活習慣病が広がりつつある理由を解き明かそうというものです。そして、この理由として、高所に暮らす人たちがグローバリゼーションという変化に、身体的あるいは文化的に適応しきれないことが原因ではないかという仮説を用意しているわけですね。

奥宮●そのとおりです。フィールド医学の強みは、医者が課題をもって現地に出かけることで、病気の人だけでなく健康な人の体も診察することにあります。

こうした作業を通じて、人が病気になるのは、人の生まれつきの体質や食生活などの私的な理由だけでないことを明らかにすることができました。ある地域社会がそなえた生活様式、労働の内容、人的ネットワークなどの社会的な要因も深く関わっている。この視点から人と環境との関わりを考える枠組みができたと思っています。

高地で暮らしてきた人の体は、伝統的に低栄養食でもエネルギーを生み出せるつくりになっています。高所に住む人には、いわばその人たちなりの「内なる環境」があったのです。しかし、そこに物流の拡大を通じて「外なる環境」、すなわち異質な食生活や生活様式が持ち込まれることによって、両者のあいだに「せめぎ

おくみや・きよひと(右)
専門はフィールド医学。研究プロジェクト「人の生老病死と高所環境——『高地文明』における医学・生理・生態・文化的適応」プロジェクトリーダー。二〇〇四年から現職。
えんどう・たかひろ
専門は政治学。研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」助教。二〇〇四年から現職。



あい」が生じるようになった。

生活習慣病というのは、そうしたせめぎあいを可視化したものだと考えています。

◎人間の体に刻み込まれた環境問題を反映する病気

遠藤●なるほど、高所はそうしたせめぎあいを見るのにはもってこいの場所ということですね。

疾病の原因を体の仕組みのレベルだけで考えるなら医学の話だけですみます。しかし、人間の暮らしを取り巻く経済や物流とのつながりまで視野に入れると、それだけではすまないですね。奥宮●我々のプロジェクトが医学研究をベースにしつつ環境問題との接点を見出せるのは、まさにその点においてであると考えています。病気の原因をその人の体質だけに注目するのではなく、その人を取り巻く外界とのつながりにおいて捉える見方です。

人間の体は、その人を取り巻く外の世界からの影響を色濃く反映します。その意味で、病気や老化の変容は、「人間の体に刻み込まれた環境問題」という視点から捉えることができます。

遠藤●地球研にきてもっとも驚いた経験は、アイスコアの考えにふれたことです。氷の柱に過去の地球環境のデータが含まれているなんて、まさに目から鱗が落ちる思いでした。奥宮先生のお話にもなんだか同じような印象をもちました。フィールド医学の研究者からみれば、氷の柱ではなく、人間の体にこそ環境のデータが集積されていて、そこからどのような情報を引き出すのか勝負どころというわけですね。

奥宮●はい、我々のプロジェクトも今年が2年目。今後は、こうした研究で得た成果を学術論文として公表することはもちろん、調査地の住民の福利にいかに関与できるかも考えなくてはならないと思っています。

2009年4月2日 プロジェクト研究室にて

地域セミナーを終えて〈大阪〉

第4回地球研地域セミナー「災害と『しのぎの技』——池島・福万寺遺跡が語る農業と環境の関係史」

島畠をキーワードに、災害と環境、人の営みの歴史を読み解く

話し手 ● 塚本浩司 (大阪府文化財センター技師) × 木村栄美 (地球研プロジェクト研究員) ×
 鞍田 崇 (地球研プロジェクト上級研究員)

編集 ● 田中克典 (地球研プロジェクト研究員)



砂の部分は洪水層で、池島・福万寺遺跡には弥生時代から近世にかけて洪水層がある。厚いところで2mに及び、当時の洪水の規模を物語っている (撮影: 佐藤洋一郎)

歴史のなかで人間はさまざまな災害に悩まされ、社会的混乱を経験してきた。では、そのような事態をどのように乗り越えてきたのか。縄文晩期から近世までの生活面を連続して残す池島・福万寺遺跡の分析から、人間が災害をどう克服してきたのか、その「しのぎの技」の一端が解き明かされつつある。

鞍田●今回のセミナーは、大規模水田遺構として知られる池島・福万寺遺跡の調査に一つの目途がついたところで、その成果の一端を発表する場として企画されました。地球研と大阪府文化財センターの主催ですが、どのような趣旨で開催したのかをまずご紹介ください。

河内平野の遺跡が伝える災害の歴史と「しのぎの技」

木村●池島・福万寺遺跡は、たび重なる洪水被害を受けてきたにもかかわらず、古くから耕作地として利用されてきました。しかも、発掘規模が大きいことから、環境変化によってどのように破壊され、復興したかを推測できる貴重な遺跡です。現在の環境問題との関わりにおいても、情報として伝えることに意味があると考えてセミナーを開催しました。鞍田●セミナーでも、洪水が話題にされていましたね。洪水が土地を肥沃にする面もありますが、日本では多くの場合、山間部から平地部までが急峻で、土砂が土地を埋めてしまう。この遺跡では、

●第一部
 「考古学からみる災害の爪痕」
 基調講演: 大庭重信 (大阪市文化財協会文化財研究部学芸員)
 対談: 井上智博 (大阪府文化財センター副主査) × 大庭重信

●第二部 パネルディスカッション
 「自然科学分析からみる災害としのぎの技」
 司会: 佐藤洋一郎 (地球研副所長・教授)、パネリスト: 宇田津徹朗 (宮崎大学附属農業博物館准教授)、藤井伸二 (人間環境大学准教授)、木村栄美 (地球研プロジェクト研究員)、田中克典 (地球研プロジェクト研究員)

●開催概要
 2008年11月18日(土) 13:30~16:30 (大阪府立弥生文化博物館)
 参加者: 約100人

洪水をどのように捉えればよいですか。塚本●洪水の規模が小さければ、その痕跡は耕作によってまったく見えなくなることもあります。ところが、この遺跡周辺では激しい洪水が多かったことで、洪水の痕跡が残ったと考えられます。鞍田●なるほど、ここでの洪水跡は災害として見てよさそうですね。

セミナー後半では地球研関係者を交えて、この遺跡を手がかりに環境変化への対応のあり方について議論がなされました。この問題を考えるにあたって、中近世の「島畠^{しまばた}」をキーワードとしていましたが、これは洪水後に農地を確保する対処策、技法の一つでしょうか。

塚本●そうです。まさしく「しのぎの技」です。洪水があると、水田だったところに土砂が堆積します。水田は粘土質の土で作られるので、粗い土砂を取り除く必要があったのでしょう。その土砂を集めて盛った場所が島畠です。

災害と「しのぎの技」のバリエーション

鞍田●すべての島畠が同じ目的で作られたのでしょうか。

塚本●近世以降は、おそらく干ばつ対処策でしょうね。水田は、水が溜まるように地面を掘り下げて作ります。掘り下げたときの土を一か所に寄せて盛り上げると、そこには水が行き渡りませんから畠にしたのだと思います。見た目は中世のものと同じですが、意図がまったく逆だと考えられます。

河内平野を流れる大和川が江戸中期の宝永元年(1704)に付け替えられたことはよく知られていますが、池島・福万寺遺跡周辺においても、その頃を境に井戸の掘削が増加します。おそらく、洪水に襲われるようなところだったのが、大和川の付け替え後は水不足にも悩まされるようになり、耕作法も変わったのではないかと考えられます。

木村●大和川の付け替えが水不足をまねいたとのことですが、その後の享和元年(1801)刊行の『河内名所圖會』などの絵図を見ると、ため池もたくさん作られていますし、水不足で困った村人の訴えを記した文書も残っています。

また、中世と近世とでは、島畠で栽培していた作物も違ったようです。近世の河内一帯に見られたことですが、ワタを栽培していたことが文書や絵図に出ています。

塚本●中世の時代の地層からはソバ属の植物の花粉がたくさん出土するという事です。ですから、先ほどのお話と文献をつきあわせると、島畠では中世にはソバ、近世になるとワタを栽培していたと推測できます。

木村●栽培されていた作物の違いで言えば、プラントオパール^①の形状を分析すると、古代に大きな洪水があった前後に現代のイネの温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとの割合が変動するとの話もありましたね。これはこれで、島畠という土木的発想とは異なる「しのぎの技」と言えるかもしれません。

つかもと・ひろし
専門は考古学。池島・福万寺遺跡の発掘調査に従事。環境と人間活動の関心に興味を持つ。二〇〇五年から現職。



くらた・たかし
専門は哲学。研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—」プロジェクト上級研究員。二〇〇九年から現職。



きむら・えみ
専門は日本文化史・喫茶文化史。研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—」プロジェクト研究員。二〇〇八年から現職。



たなか・かつのり
専門は植物遺伝学。研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—」プロジェクト研究員。二〇〇六年から現職。



災害と環境変化に対処する 人びとの叡智を知る

鞍田●これまでの話を伺うと、災害と「しのぎの技」、それぞれにバリエーションがあるようですね。セミナー当日にフロアから、災害には洪水の他に早魃があったのではないかという質問がありましたよね。災害としての洪水、「しのぎの技」としての島畠に話題を絞られたことに、特別な意図はあったのですか。

木村●池島・福万寺遺跡がうけた災害としては、もちろん洪水だけでなく早魃も考えられますし、人災である合戦もあります。遺跡周辺ではいろいろな災害があったはずで、さまざまな「しのぎの技」もあったと考えられます。ただ、従来はそういうことへの関心が希薄でした。

これに対し、今回のセミナーでは、洪水と島畠を、災害と「しのぎの技」を示す一つのきっかけとして両者の連関性についての注目を喚起しその他の事例へと話題を展開することができたと思っています。鞍田●なるほど、話題が発展したことは、結果としてよかったわけですね。

ところで、地域セミナーでは、それぞれの地域ならではの話題も求められるか

と思うのですが、その点ではいかがでしたか。たとえば、洪水に対する「しのぎの技」としての島畠という組み合わせは河内平野にかぎってのことですか。要は、大阪府で地域セミナーを開いたことによつてのような意義があったのかを伺いたいのですが。

塚本●島畠は奈良盆地、京都の八幡市、愛知県などにもあります。これらの島畠も洪水や早魃に対する適応だと思いますが、考古学的調査でも詳しく判明しないことがあって、必ずしも全体の様相がわかっていないわけではありません。

一方、私たちの遺跡では、大規模で精密な調査によって具体的なデータを出すことができています。大阪府としては、池島・福万寺遺跡という他に類例のない貴重な素材を手がかりに、このセミナーを通じて人間活動の変遷について代表的な事例を発信できたと考えています。

木村●先ほども出ましたが、河内平野は治水のため1704年に大和川が付け替えられました。皮肉なことに300年後の現在でも同地域は水に悩まされていて、恩智川の治水工事をしています。遺跡調査の成果は護岸工事前後の様相を知る手がかりになりますが、同時に300年前の護岸

工事に対する評価であり、現在行なわれている工事のアセスメントにもつながります。

地球研としても調査結果に基づいて、今なお続く遺跡周辺の環境変動を市民に問うわけですから、大阪府でセミナーを開催したことに意義があったと考えてよいのではないのでしょうか。

環境変化という自然を 受けとめる姿勢から学ぶ

鞍田●これからの課題についてはどうでしょうか。

塚本●セミナー当日のお話にもありましたが、島畠が増える中世後半と時期を同じくして、マツの花粉が急速に増加します。マツは荒れた山の初期に生える植物で、遺跡周辺にあったと考えられます。

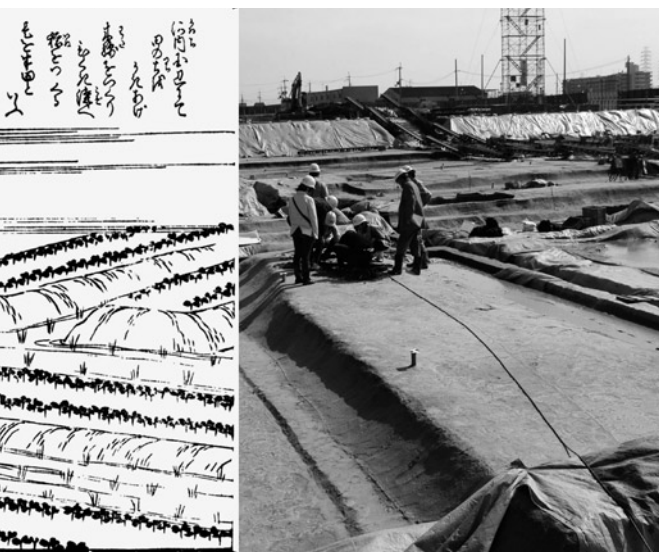
荒れた山として考えられるのが生駒山です。花粉の急増とは時代がずれますが、近世の生駒山は草山であったとされています。そこに雨が降ると土砂が流出して洪水が起こったのではないかと考えられます。このつながりについて、これまでの調査を踏まえて検証する必要があります。また、今後調査する箇所から遺跡全体の様相を把握することも課題です。木村●遺跡の調査だと発掘された遺物に目が向きます。しかし、暮らしとの関わりの中かで環境破壊が起こり、そこから人びとがどのようにして、どのような社会状況の中かで復興していったかが見えてくれば、もっとおもしろいと思います。

さきほどのマツの増加にしても、草木の緑肥としての利用、人口圧にともなう薪材伐採の増加などの人為的な要因が想定されそうです。そうした検討こそが、地球研のプロジェクトとしても大きな意味があります。

鞍田●お二人のお話を伺って思ったことなのですが、島畠は風土に対する適応の仕方ということもできますね。つまり、自然に即すかたちであり、「しのぐ」というのは「防ぐ」とか「戦う」じゃなくて、そういう自然を受けとめる姿勢といつてよいかもしれません。

セミナーでは、現在の環境問題とのからみからも、そういった適応の意義をあらためて考える必要が示唆されたわけですね。これからの調査はその意義を深める作業となるよう期待しています。

2009年4月8日 地球研「はなれ」にて



中世、近世には砂や土が盛り上げられた島畠がある。右図は中世の島畠で場所によっては幅が20m、長さが100mと巨大である（撮影：佐藤洋一郎）。左図は近世の島畠で、島畠ではワタが栽培されていた（『日本農書全集 第15巻』農山漁村文化協会 1977）収録大蔵永常『綿圖要務』より）

地域セミナーを終えて〈沖縄〉

第5回地球研地域セミナー「やんばるに生きる——自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光」

持続可能な観光には、発地型から着地型への発想の転換が欠かせない

話し手●花井正光(琉球大学観光産業科学部教授)×島袋正敏(やんばるものづくり塾塾長)×
瀬尾明弘(地球研プロジェクト研究員)×湯本貴和(地球研教授)

編集●湯本貴和

沖縄島北部「やんばる」は、飛びぬけて豊かな生物多様性をそなえている。森と川は、すべての命の水瓶であり聖域。人びとは自然の恵みに感謝しつつ資源を枯渇させることのないよう利用してきた。地域住民の自然観の反映でもあった。いま、この知恵をどう蘇らせることができるか。

湯本●会場の比地公民館は、那覇から名護まで高速バスでおよそ1時間45分、名護から最寄りの奥間までバスでおよそ50分。どれだけの方に参加いただけるか心配しましたが、やんばるの方だけでなく、那覇市の行政関係者や琉球大学・沖縄国際大学の学生の姿もありましたね。
瀬尾●所在地に「字」がつくような場所で地域セミナーを開いたのは、地球研としては初めての試みでしたね。(笑)

花井●沖縄はいま一極集中が進んでいて、東京や関西から講師を呼んで講演会が開かれるのはだいたい那覇市です。今回は沖縄の過疎地域に住んでいる人びとを力づけることが目的ですから、都会的那覇に住んでいる方は、とりあえず主たる対象ではないということで……。

島袋●やんばる地域の「豊かな自然を愛でる」という視点のセミナーはこれまでもあったのですが、人の暮らしと自然との関わりをトータルなかたちで問題にしたセミナーというのは、おそらく初めてではないでしょうか。

じつは二次林の「やんばる」の森

湯本●私たちはやんばるというと、ヤンバルクイナやヤンバルテナガコガネに代表される数多くの固有種や「原生林」を連想しがちです。しかし、そこには山の資源を利用し続けてきた人間の歴史があった。その知恵を思い起こすことによって、「環境負荷の低い、豊かな生活のヒント」が含まれているのではないかと。

もちろん、グローバリゼーションの恩恵があり、現代医療の導入によって寿命が伸び、物流の発達のおかげで地域的な

●講演

「生物と文化の多様性はなぜ必要か」湯本貴和(地球研教授)
「やんばるのムラの生活——人と自然の関わり」仲原弘哲(今帰仁村歴史文化センター館長)
「地域の自律観光とニューツーリズムの活用」水嶋智(観光庁観光資源課長)
「文化としての景観とその活用」井上典子(文化庁文化財調査官)
「よみがえる村々の姿と暮らし——高精度空中写真との出会い」早石周平(琉球大学非常勤講師)

●パネルディスカッション

「やんばるの観光にいかす人と自然の関係性」
コーディネータ：安溪遊地(山口県立大学教授)、パネリスト：島袋正敏(やんばるものづくり塾塾長)、久高将和(NPO法人国頭ツーリズム協会顧問)、花井正光(琉球大学教授)、湯本貴和(地球研教授)

●開催概要

2009年2月13日(金) 18:30～20:30〈名護市民会館〉
2009年2月14日(土) 10:00～16:00〈国頭村比地公民館〉
参加者：のべ約210人

飢饉や自然災害に対する抵抗力は格段に上がりました。しかし、その反面、地域の気候風土に不適な「外来の」文化を持ち込むことによって、一見派手で豊かだが、モノやエネルギーを浪費し、健康にも良くない暮らしになっているのではないかと。そういう問いかけを今回したわけです。
瀬尾●その「原生林」も、かつては人間の手がそうとう入っていたという指摘が、今回の発表でありましたね。

湯本●比地のセミナーでは、ポスター展示として、1945年に米軍が撮影した高精度航空写真や古い比地の写真を展示しました。というのは、私たちの研究でも、森林総合研究所や琉球大学の研究でも、いま目にする山腹の照葉樹林地域は、ほんの50年前までは稜線に至るまで段々畑が広がる農地であったことがわかったからです。「原生林」のイメージがするやんばるの少なからずの部分は、人手が入った二次林です。

着地型観光の提案

瀬尾●今回のテーマの着地型観光について説明していただけますか。

花井●これまでの旅行形態は、旅行する東京や関西の人たちの視点・出発地の発想でツアーが組まれる発地型観光でし

た。ところが、いま台頭しつつあるニューツーリズムはそうではなくて、地元の人たちが旅行者に見せたいものを見せる到着地からの発想がベースです。それがすなわち着地型観光というものです。

発地型観光は、自然をオーバーユースしたり、地域の生活に土足で踏み込んだりする観光になりがちです。発地型から着地型への発想の転換が、持続可能な観光には必要ではないかと考えています。

今回は、地元住民が自ら企画したメニューにもとづいて、初めて自分のムラをガイドしました。80名にものぼる外の人間が比地のムラのなかをぞろぞろと歩いたのは空前のことでした。みなさん、着地型観光とはなんぞやを実感することができたのではないのでしょうか。

湯本●ムラの文化の源ということで、御嶽



パネルディスカッションが行われた国頭村比地公民館。多くの参加者に、会場は熱気につつまれた

はない・まさみつ
専門は動物生態学、保全生物学。
文化庁記念物課での四半世紀に
わたる在職経験を活かし、人と
自然の関わりをテーマとした新
観光の可能性をテーマとする地
域づくりを提案している。
二〇〇五年から現職。



しまぶくろ・せいびん
専門は実践地域学。名護博物館
館長を開設の一八八四年以来
務め、絶滅寸前だった琉球犬
や宮古馬、島豚(アグー)などの
在来種の飼育・繁殖に尽力。退
職後も島豚文化や泡盛文化の
普及などに力を注ぎ、島豚の
保存・普及活動で二〇〇八年度
琉球新報活動賞受賞。



せお・あきひろ
専門は植物分類学・生物地理
学。研究プロジェクト「日本列
島における人間―自然相互関
係の歴史的・文化的検討」プロ
ジェクト研究員。二〇〇六年
から現職。



ゆもと・たかかず
専門は生態学。研究プロジェクト
「日本列島における人間―自
然相互関係の歴史的・文化的検
討」プロジェクトリーダー。
二〇〇三年から現職。



も案内していただきましたが、聖地を他人に見せるというのはどうでしたでしょうか。斎場御嶽が世界遺産になるとき、沖縄でもっとも神聖な聖地に観光客が大挙して押しかけることに、抵抗感をいだく人たちも多かったと聞いています。

島袋●程度の問題でしょう。女人禁制、男子禁制に厳しい御嶽もありますが、地元が、「ここまでは受け入れるが、その先はだめ」という基準、規律をしっかりとっていることが肝心です。

湯本●西表島の^{シラドワイ}種子取祭でも、観光のためではなく、自分たちのために祭事をするという意識が強いでしょう。だから、カメラマンにもやってよいこと、悪いことを事前にきっちり指導しますね。^{あらぐすく}新城島の「アカマター・クロマター」に至っては、カメラ、ビデオ、録音機はむろんのこと、メモやスケッチも許さない。花井●でも、見るという参加は拒否していません。祭り(祀り)というのは、そもそも見られることで成立する面もある。伊勢神宮でも本殿の前までは、津々浦々から多くの参拝客を呼び込んでいる。しかし、内裏の神事は見せない。外からの観客を入れることで、祭りがどうあるべきなのかを自分たちで真剣に考えればよいのでは……。

島袋●祭りはこれまでも変容してきたし、これからも変容します。地元がはっきりとした意志・意識さえ保っていれば、この手の問題は解決すると思いますよ。

地元が使い捨てされない観光をめざせ

島袋●沖縄最大の滝である比地大滝には年間6万人の観光客がやってきます。しかし、比地のムラにはまったくお金が落ちない。落とす仕掛けがないからです。特産品や民芸品などをおみやげにすればよいのですが……。民具を作るのを見せるとか、作る体験をしてもらうのも一案ではないかと考えています。

花井●前は、共同店の前を駐車場にして、そこでトイレを借りて飲み物やらなにやらを買ってもらうようになっていた。いまは大滝へのアクセス道路や便民施設が整備されたおかげで、集落とのつながりがなくなってしまった。

湯本●観光資源が滝や巨木というのは、かえって難しい。エコツーリズムは、滝や巨木に行くまでの行程を楽しもうというものでしょう。しかし、なまじはしっかりと目的があるので、途中にながあっても付録という感じになってしまう。野生生物対象のツアーも同じです。滝や木は動かないからよいが、ゴリラのツアーだと、見られなかったらお金を返せということになる。(笑)

島袋●お客さんに楽しんでもらう仕掛けをつくる地元の人たちが、自分たちで楽しまなければダメだと思う。民具を作ってみたり、古酒を作ってみたりする。沖縄の人が島豚を保存するのも、自分たちが楽しむためです。

個人には限界がある。みんなを巻き込んで楽しむ。孤軍奮闘では続かない。

地球研のグローバルな発想を発信する

湯本●それにしても、過去4回とはまったく違うセミナーでしたね。

花井●地球研が提唱している考え方の一つにグローバル——地球規模で考えて、足下から行動するということがあります。その意識を地域のみなさんと共有するために、暮らしの場でメッセージを直接に伝える意義は大きい。

島袋●博物館も、「^{やかた}館にみんなこい」ではなく、地域に、人びとの生活の場に出かけることが大切だと、私は言い続けてきました。お金をかけていかに立派な施設をつくるか、よく相談されましたが、私はいつも、「世の中でいちばん小さな博物館をつくりなさい。ほんとうの博物館活動は博物館の外にあるのですよ」と。

瀬尾●地球研の列島プロジェクトとしてはどうでしたか？

湯本●フィールドワークというのは、地元の方がたをさんざん煩わせ、そのくせ成果は研究者が独り占めしてしまうという歴史を繰り返してきましたね。世の中にプロジェクトなるものは山ほどあります。でも、多くのプロジェクトは、「そういえば、なんとかプロジェクトといって、たくさん学者がきたけど、あれって結局どうなったんだっけ？」ということになっている。私は「あのプロジェクトがあったから、この地域のいまがあるのだ」と言っていたくような活動がしたいと思っています。瀬尾●その意味で、今回のセミナーは現地でどのように受け止められたのでしょうか。花井●今回のセミナーは、プログラムや運営に地元住民に参加していただいたことで、テーマとそのねらいを互いに共有できたと思っています。会場のレイアウト、昼食の内容、ムラ歩きの状態などは事前相談も3回行ないましたね。

セミナーの直後、中心的な役割を担ってくださった方がたが、昔の写真を貼ったポスター展示の場所で「反省会をした」とおっしゃいました。その反省会で、今回寄贈したパネルの有効活用策について議論があって、「今度の地域セミナーを比地再生のきっかけにしたい」という前向きな意見でまとまったと聞いています。セミナーの内容はもちろん、今回の運営方式も地域貢献の観点からも評価されるのではないのでしょうか。

湯本●環境問題を考えるには、足下からの発想が不可欠です。「自然の摂理を学び、自然と共に生きる」知恵は、地元の暮らしにこそ求められます。

観光というと、少し浮ついたイメージもあるのですが、都市との交流のひとつの形だとすると、地元の伝統的な生活様式のなかにある「環境負荷が少なく豊かな暮らし」を再評価する契機となればすばらしいと思います。

2009年2月15日 奥間ビーチにて

都市と地球環境を結ぶ——「環境・経済・社会」の三つの成熟都市の実現のために

研究プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト：そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」

むらまつ・しん
専門は建築史・都市史・都市環境
文化資源学。研究プロジェクト
「メガシティが地球環境に及ぼす
インパクト」そのメカニズム解
明と未来可能性に向けた都市圏
モデルの提案プロジェクトリ
ダー。二〇〇九年から現職。

プロジェクトリーダー●村松 伸(地球研教授)

未来はそもそも不確実なものだ。そういう都市の未来可能性を探るというのは無謀というものかもしれない。しかし、手をこまねいていられるほど、発展途上国のメガシティとその予備軍が地球環境に与える影響は小さくない。ジャカルタ首都圏、コペンハーゲン、東京首都圏をフィールドに、環境、経済、社会の三つを軸に歴史をたどり、複数の現象がいかなるメカニズムで関係性を保持しているかを指標化。未来のシナリオを描く手法を提案したい。

なぜ、結ぶか

都市は地球を減らすか、救うのか？

都市の人口が世界総人口の半分以上を超えた。日本では都市の縮減が喧しいが、世界的に見れば、人口移動、出生率増加、死亡率の減少で、都市人口は急増している。

この都市の拡大は、中国、インド、ブラジルなど巨大人口を有する発展途上国の経済成長とあいまって、食料資源、エネルギー資源の大量消費を促している。その結果、地球上の資源は枯渇の危機に瀕し、二酸化炭素の排出によって温暖化は進む。

でも、人が集まることによって誕生した都市は、高密度による余得を人びとにもたらした。1 + 1 は、都市においては、競争や助け合いが起り、5 にも6 にもなる。都市の誕生以来、人類が培ってきたこの現象を、「集住の知恵」、「高密度の知恵」、あるいは、直裁に、「都市の知恵」と呼んでもよいだろう。

当然、この「都市の知恵」は、都市そのものの改変を促してきた。都市を秩序化させる、都市の中に自然を取り込む、田園都市をつくるなど、自然を決して排除してきたわけでもない。地球環境という問題に眼を向け、これに取り組もうとする行動も、この再帰的な「都市の知恵」の延長線上にある。

いかに、結ぶか

都市の状況を指標化し、未来を予測する

この都市が地球環境にもたらす二面性は、総論として理解できても、具体的にどのような関係にあり、それに対してどこに触ることで負の連鎖を修正し、正の流れを促進させるかは、いまだ直感的でしかない。

私たちのプロジェクトのコアとなる研究は、都市に存在する空間、生起する現象を、複数の都市に当たり、環境(資源、水、食料、廃棄物、大気など)、経済(GDP)、社会(豊かさなど)の三つに大分類して調査する。そのうえで、カテゴリー内の複数の現象がいかなるメカニズムで関係を保持しているかを明らかにして指標化し、これに基づいて複数の未来をシナリオとして描いて見せることにある。そして、それぞれの望ましい未来に向かうのに、どのように介入すればよいかの手法を提案する。

世界中の都市は、その立地、歴史的経緯などによって、未来に開かれている道も異なっている。私たちが、歴史や環境等への価値観にも深く関与しようとする理由はそこにある。とはいえ、世界中の多数の都市のデータが即座に簡単に集まるわけではない。GDPのような簡単な数値でさえ、都市ごとに収集することは容易でない。プロジェクト全体を統御するフレームワークを

構築すると同時に、データ収集の手法を一から考える必要がある。そのため、インドネシアのジャカルタ首都圏、コペンハーゲン、東京首都圏の3都市をフィールドワークの中心都市に設定し、現象をミクロに、深く観察するのである。

結んだ後に

豊かさある都市への KAIZEN(改善)型対応

成熟した都市、しかも、環境、経済、社会、のすべてにわたって。これが私たちの提案したい都市の未来可能性である。しかし、三者は鼎立するわけではなく、それぞれがトレードオフの関係にある。また、それぞれの都市がおかれた、立地、歴史的経緯、文化的環境などから、三者のどれを優先してきたのか、現在に至る道のり、そして、未来すら異なってくるだろう。こんな都市の複雑さを眼の前にして、私たちはどんな新たな知恵を、世界に対して提案できるのだろうか。

地球研が提唱する地球環境創造への知恵には生態学的対応がある。それはゆるやかで長期的で、生態系の変化に順応しつつ、といったものであると私は理解している。ただ、都市は、なかば人工物、なかば人工化された自然の集積である。生態学的対応も有効かもしれないが、同時に、もう少し高速度で、しかし、衆智を集めた、修正可能な手法も必要だろう。都市はひとりの建築家、都市計画家が独善的に計画できるほど単純ではない。ここで必要なのは、通俗的な言い回しでいえば、それは日本生まれの「KAIZEN(改善)型対応」のような斬新的なものであるうか。豊かな都市へと歩む道筋の杖として、これを提示したい。

そんな曖昧でロマンチックな予測を抱いたまま、私はプロジェクトを始めようとしている。いずれにしても、プロジェクトの未来も不確実性が高く、これすらも「KAIZEN型対応」で対処するしかないだろう。



デリーの地下鉄。シンガポールのソフトウェア、日本の資金、韓国の建設によって、都市は便利になる。だが、一方で、拡大し、地球環境には負荷となる(撮影：村松)

人文学と地球環境学

木下鉄矢(地球研教授)

私の専門は中国哲学史、6年前にこの研究所にやって来た時には、文系最右翼の人間が来たと言われたものである。ここに来てはじめて水文学という学問があることを知り、天文学、人文学と同じ作りの言葉なのだと興味深く思った。

私の学問的営為は、広い意味で人文学に属すると自分では考えている。この6年間、地球研は何を研究する研究所なのか、人文学者はそこにどのように参画するのか、について考えてきた。この9月いっぱいまで退所するので、いわば遺言書としてその考えのいささかをまとめておきたい。

人文学とは？

大学の学部で云うなら、人文学とは文学部で行われている学問、オーソドックスには、哲学、史学、文学の三学科に分かれている。研究分野、その対象と方法は分化している。

しかし、私は人文学には人文学に固有の問い、すなわち課題があると考えている。それは、人とは何か、人として善く生きるとは何か、という問いである。

地球環境問題とは何か

地球環境問題の解決に資する研究を行うというのが地球研のミッションである。では、その地球環境問題とは何か。いまだに地球研ではこの点が明確ではない。すなわち研究所としての研究課題そのものが不明確にされてきた。そのために地球研は迷走してきたと私は診る。

私は端的に、地球環境問題とは、最も基底的生命環境である気水圏に現在起こっている生命環境としての問題状況のことであると考え。

「地球」という言葉がかぶせられている

ことに、私は気水圏に関わる三つの意味を数える。一つには気水圏が全地球的に連続するひとつの圏域だということ。二つには気水圏の資料＝大気と水とは

つい最近まで無尽蔵と考えられ、人間活動が気水圏にかかる負担は限りなく希釈されて影響ゼロと考えられていたが、実は直径約12,700kmの地球の表面に30km程度の厚さで広がっているだけの有限の圏域だという現実が認識されたこと。三つには地球は天文学的確率の稀少さで存在する。生命が生まれ繁殖してきた天体であるが、それは実にこの気水圏あつてのことだということ。この三つである。

地球研は何をするのか

したがって地球研が行う研究とは、現在顕在化している生命環境としての気水圏のさまざまな問題状況を対象に、その状況発生メカニズムを解析し、そこに関与している人間活動の負荷の質と量を析出し、その負荷を低減すべく人間活動の質と量をチューニングして行くその具体的な理路と方策を割り出す研究である。

人間への警告

人には暴力的性向と友愛的性向とが併存している。それが現実である。だがそれが現実であるからこそ暴力的性向を嫌い友愛的性向に生きることが人の人たるゆえんであり、人に対する友愛はさらに広く生きとし生けるものへのいとしみの心に基礎付けられるとする思想が語られ



2007年8月、黄河河畔、花園口付近にて。水と大気と緑が溶け合う気水圏こそ僕たちの、そしていのちたちのふるさと

てきた。これが善く生きることを問う人文学の核心にある思いである。

その目から見る時、現在顕著となっている地球環境問題は、基底的生命環境である気水圏に過負荷を強いてきた近代以降の強大な人間活動の創出者、推進者たちに対する、君たちの生き方は結局のところ人として善い生き方であったのか、あるのかという警告、我々に反省を迫る警告に他ならない。

人文学と地球環境学

地球環境学の構築に、人文学は、人とは何か、人として善く生きるとは何か、という人文学の核心にある問いをもって参画する。

人が善く生きるという問いが、生きとし生けるものとの関係において如何に考えられてきたか。現在の強大な人間活動の担い手たちが如何なる世界観に生きているのか、それは善い生き方なのか。近代以降の強大な人間活動の進展の歴史を明らかにし、その推進者たちの生き方を解析して、どこが善くなかったのか、なぜこうなったのか、を考究する。

そしてその反省に立つて新しい時代を担う、人としての善い生き方を展望し、現在の強大な人間活動をどの方向にチューニングしてゆくのかを提言する。これが地球環境学の構築において人文学が担う責務であろう。

経験を重視する「知」の地球環境学を

中西正己(地球研名誉教授)

上賀茂の地を訪れるたびに「恵まれた研究の場」と「活気ある人間のエネルギー」、そこから地球研の勢いを感じます。

現場を重視する研究プロジェクト

現場主義に徹した研究プロジェクトの成果の蓄積は、「地球環境学の構築」への重要な過程であると信じています。現代医学は、「書物偏重」の権威ある大学出身の内科医ではなく、ペスト患者に直接接触し、英仏戦争に従軍し負傷兵の治療に当たった理髪外科医の経験により確立されたと言われていています。「学の構築」に至る道筋は、「現場を知り、その経験から得た知」にあると考えられるのではないのでしょうか。

禅の世界には「冷暖自知」という用語があります。冷たい、暖かいのは理屈で学んでも役に立ちません。コップを手にし、お茶を飲むことによって初めて冷たい、暖かいという「真」を知ります。異論があると思いますが、提唱されて久しい「地産地消」や「循環型社会」という用語は理屈では判りますが、現在のグローバル化した社会・経済機構の中でどのように実現していくとするのか、その過程がまったく私には見えてきません。

研究プロジェクトは地球環境学の創出に向けての成果を出すことはもちろんですが、多くの研究プロジェクトを支えておられる若者(ポスドク)の将来がどうなるのか懸念されます。プロジェクト研究をとおして得た貴重な経験から若者が研究者として育つ具体的な提案を地球研から発信されることも成果の一つかもしれません。

中村桂子(JT生命誌研究館館長)氏は、2007年5月17日の朝日新聞でヒトゲノム解析の成功後、生命科学研究分野で多くの大型プロジェクトが立ち上がったことに触れ、「税金を用いた巨費の投入と成果も問題だが、最も気になるのは大勢の若者が関わっていることである」と指摘し、「科学の本質を深く考える研究者が育たないのでは？」と心配されておられます。年寄りの小言ですが、プロジェクトという共同研究の実践を通して所内外から、「あんさん、なんぼのもんや」と言われないような「研究者の心」が育つこともいいな成果かもしれません。



故東正彦さんが地球研創設に向けての抱負を熱く語ってくれた想い出のバイカル湖——ニュートリノ観測基地。結氷した湖上に設置されたウインチを使い、ともに採水作業を行なった(2000年3月5日撮影)

広報活動

国際シンポジウムや地域・市民向けのセミナー、出版物に至る多様な広報活動に、ものすごいエネルギーを感じます。この活力ある広報活動にもかかわらず、旅先での地球研に関しての知名度は「もう一つだなあ」と感じます。まだまだ時間が短いかもしれません。

日本植物生理学会では「学会」と「社会」とを結び、植物をもっと理解し、研究することの重要性を伝える目的で、ホームページに「みんなのひろば」という質問コーナーを設けています。小・中学生、教師、会社員・自営業者など一般市民から質問を受け付け、それに応える活動を行なっているのです。その効果は大きく、質疑応答の中から抽出した項目を掲載した『これでナットク! 植物の謎』を出版(講談社)し、大好評とのことです。

不老長寿の薬

地球研の創設に多大な貢献をされた故東正彦(京大大学生態学研究センター教授)さんが、カリフォルニア湾で水難事故に遭われました。その3週間前、氷点下20度以下の極寒のバイカル湖上で、「地球研の目標達成には、『任期制』と『連携研究機関』の強化は絶対である」と熱く語っておられた姿は今も私の心に強く焼き付いています。

「任期制」と「連携研究機関」は地球研の不老長寿の薬——^{てんだいりやく}天台山薬であると、私は信じています。終了した研究プロジェクトの成果の分析から地球研の目指す「学」の輪郭がボヤーと見えてきたら嬉しいですね。応援しています!

なかにし・まさみ

専門は水域生態学、陸水学。地球研創設時に京大大学生態学研究センターから移籍し、2年間研究部に所属。初代研究推進センター長をつとめる。地球研のある上賀茂試験地の整備構想に関わり、日本で初めてPFI方式を導入して建設される地球研の施設整備委員会にも参画。財団法人海洋化学研究所理事。著書に『岩波講座 地球環境学 4 水・物質循環系の変化』(分担執筆、岩波書店 1999)、『はかってなんぼ——社会編』(分担執筆、丸善 2004)などがある。



所員紹介——私の考える地球環境問題と未来

「足らぬを知る」楽しさ

細谷 葵 (地球研プロジェクト研究員)

パンに餅のような食感を求める日本人、緑茶にミルクと砂糖を入れるイギリス人——日々の食生活において、なにが「しかるべき」食べ物なのかは、人類に共通して自明のものではありません。食べ物に対する価値観は、所属する文化・社会によってあるていど規定されます。先史時代においても同じように、社会的に食べ物に優劣がつけられたり、アイデンティティに結びついたりすることがあったはずです。

私は、植物考古学という手法を使って、食用にされた植物の実用性ばかりでなく、文化要素としての植物の役割を考えることで、人間ならではの環境とのかかわりの歴史を復元したいと思っています。

植物考古学と民族調査 ——「足らぬを知る」

植物考古学は、遺跡から出土する植物の遺存体(炭化種子など)に基づいて、人間と植物との関係を考察する研究分野です。

考古学では一般に、土器や石器などを「人工遺物」、動植物の遺存体を「自然遺物」としますが、この分類は必ずしも適切ではありません。木の実を食べた後の割れた殻や、穀物を脱穀した後に廃棄する籾殻や



バリ島の調査先で、お昼をご馳走になっているところ。いろんな人たちと交流できるのは、民族調査の醍醐味

茎など、人の活動から生み出されるすべてのものは「人工遺物」として解釈されるべきだと考えます。

私が博士論文で研究対象とした弥生時代の「池上曾根遺跡」は、大阪府泉大津市と和泉市にかけて広がる大集落です。集落の中心となる巨大な中樞建物の周辺からは炭化したコメの籾殻が集中的に出土し、籾摺り作業が行なわれていたことが推定できました。中樞建物を集落のリーダーが管理していたとすれば、コメに関わる農耕作業をも管理しているように象徴的に見せつけることが、権力拡大を媒介した可能性もあります。弥生時代後半の段階で、コメはすでに政治的な意味をもっていたと考えられるのです。

では、農耕作業が実際にどのような社会的意味をもちうるのか。生活様式のかげはなれた現代日本に生きる私には、考察が難しい部分が多くあります。そこで、その感覚を学ぶべく、最近では伝統的農耕作業が生活に占めるウエイトの大きい現代の社会を観察しています。といっても、こうした民族調査の成果を先史時代の解釈に単純にあてはめるわけではなく、この経験をととして自分にはない視点の存在を認識することが目的です。

■リーダーからひとこと

佐藤洋一郎(地球研副所長・教授)
若い考古学者たちが、地球研でもがんばっています。国外にも多くの仲間がいて、ネットワークでつながっているようです。8月生まれのLeoさんもまさにその一人。先月は、京都—アトラント—ボン—京都と、世界一周するなど、まさに世界をまたにける活躍ぶり。好奇心のかたまりだからなあ。パイロットになりたいというのもむべなるかな。いつか、サハラとスダンを掘ってくださいよ。

バリ島で数十年前まで日常的に行なわれていた、臼と杵を使うコメの籾摺り作業。遺物、絵画などから、弥生時代にも同様の技術が使われていたと考えられる



異質な他者である過去の文化について自らの視点の不足を知り、そのうえで過去の文化の総体的な理解を目指す訓練として、民族調査を捉えているのです。

異質な他者との対話

考古学や民族調査と同じく、地球研でさまざまな分野の方がたと一緒に研究することもまた、異質な他者との対話です。異分野の研究者だけではありません。「地球環境学」というこれまで考えたことのない新しいトピックについて議論してみると、同じ考古学の研究者同士であっても、イメージの共有がなかなかできないことに気づきます。

他者が自分とは異質な考え方の体系をもっていることに気づくことは、じつはドキドキするような素敵な発見でもあります。対話を重ねながら互いの理解を目指すことは、困難であるほどに胸躍る過程です。自分に「足りない」ものを知ることを楽しみながら、これからもチャレンジを続けたいと思っています。

ほそや・あおい (愛称: Leo)

■略歴

2002年7月 英国ケンブリッジ大学考古学部 Ph.D. 課程修了、Ph.D.
2003年4月～2007年3月 早稲田大学 非常勤講師
2007年4月～現職

■専門分野 植物考古学、民族考古学

■地球研での所属プロジェクト

「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」

■研究テーマ

日本、中国の初期稲作社会における植物利用と社会構造の関係(植物考古学)
オセアニア、東南アジア等における伝統的農耕作業と社会の関係(民族調査)

■好きなもの 推理小説、映画、演劇、カラオケ、ダンス、美食、そのほか楽しいことすべて

■住みたい時代 江戸時代(元禄あたり)

■研究者以外に就いてみたい職業 小説家、映画監督、パイロット

■最近よく言う言葉 前進あるのみ!

イベントの報告

第31回 地球研市民セミナー

報告 南極から地球環境がよく見える
2009年3月13日(金)
15:00~16:30(地球研セミナー室)

第31回地球研市民セミナーの講師は、齋藤清明・地球研教授、中尾正義・人間文化研究機構理事、司会は白岩孝行・地球研准教授の3人の元南極観測隊員が務めました。

まず、第39次夏隊(1997-98年)に日本新聞協会の代表取材記者として同行した齋藤教授が、南極観測の概要を紹介。地球に残された自然のままの大陸である南極は、氷と雪の極寒の地だが、日本の観測隊は50年余、南極隕石やオゾンホール発見、氷床ボーリングによる過去の地球環境の解明などの成果を得た

こと、南極観測は「地球環境を探る窓」であるとともに、国境や軍事基地のない「平和と科学のための大陸」であることを強調しました。

続く中尾理事は、地球研勤務(2001-2009年)以前に南極観測の第12次隊(1970-72年)と第24次隊(1982-84年)の越冬隊員を務めた南極のベテラン。内陸の基地建設やそこでの滞在の経験をもとに、南極の環境とごみ処理や水の使用量など、「人間が暮らすだけでも環境に大きな影響がある」と述べました。

講演後は第35次越冬隊(1993年-95年)の白岩准教授の司会によるディスカッションが行なわれ、フロアからも、南極の資源や環境などについての質問が多く、論議が盛り上がりました。(齋藤清明)



第32回 地球研市民セミナー

報告 石油資源がなくなったとき、
どうやって生活していきますか?
2009年4月17日(金)
15:00~16:30(地球研講演室)

人類はすでに「ポスト石油時代」に突入しています。石油生産は需要に追いつかなくなり、石油資源に依存してきた人間生活は、近い将来に終わりをむかえます。今回のセミナーでは、「石油資源がなくなったとき」を想定して、児玉香菜子・千葉大学准教授の司会のもと、縄田浩志准・地球研教授と嶋田義仁・名古屋大学教授が講演しました。

石油資源の90%を中東諸国に依存している日本と、水・食料の多くを輸入に頼っている中東諸国は、エネルギー、水、食料を長距離輸送することにより地球環境に多大な負荷をかけています。ポスト石油時代を生きぬくには新たな日本—中東関係を模索しなければなりません。縄田准教授は、自身がリーダーをつとめる研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系研究:ポスト石油時代に向けて」の紹介をとおして、その土地に根ざした人間のもっとも基本的な営みである「なりわい」からの問題解決の必要性を語りました。

嶋田教授は、イラク戦争にみるように石油危機はすでに始まっているとし、人類の危機を生きるヒントを乾燥地の生活に見出しました。アフロ・ユーラシアの内陸乾燥地には、石油時代以前にすでにアニマルパワーによる国際交易網と世界帝国(モンゴル帝国、アラブ系帝国、アフリカ系帝国など)が構築されており、そこには現在の人類が学べべき、「不足を補いあう諸地域・諸民族の交流」があったとしました。

セミナー参加者の9割は50歳代以上でした。まさに石油時代を生きてきた世代の方がたとえポスト石油時代問題を共有することができた点で、今回のセミナーは有意義でした。「将来に対する提言が聞きたかった」、「内容を深めたうえで提言を期待します」というアンケート結果を受けて、今後もシリーズ化して、この問題をみなさんとともに考えてゆきたいと思います。(中村亮)

出版物紹介

■『SEEDer』0号 地域環境情報から考える地球の未来 シーダー編集委員会 編



2009年3月
昭和堂 1,000円

地球研では2007年度以来、全国の国公立大学における自然系・人文社会系の附属施設、センター等との強力な連携によって、地域情報・環境情報に関するデータ

ベースの作成と共同利用・共同研究を目的とした研究を構想してきました。

現在、「広域アジアにおける地域環境情報ネットワークの構築とデータベースの共同利用:共生・持続型社会の構築を目指して」と題する事業の準備を進めています。その一環として研究者間での情報の共有と議論の活性化をはかるため、研究連絡誌『SEEDer』(シーダー)を発行しています。2008年度末に0号を発刊し、年に2号のペースで多面的な発信をめざします。

SEEDerは「種まく人」を意味します。情報の発信と共有をとおしてさまざまな研究のシーズを発掘し、大きく成長する研究に結びつける役割を担うことがねらいです。多くの読者の参加による研究推進を目指しています。(秋道智彌)

■地球研叢書『水と人の未来可能性 ——しのびよる危機』

総合地球環境学研究所 編



2009年3月
昭和堂 2,300円

本書は、地球研でこれまでに行なわれてきた水に関する研究プロジェクトの成果をまとめたものです。生態学的観点、気象学の観点、人類学的視点、政治学的観点

など、各プロジェクトによって、水をとらえる見方や切り口はさまざまですが、水をターゲット(の一部を含む)にした地球研プロジェクトの成果が、地球研の第1期の活動の一つのまとめとして書かれています。

立本所長の「はじめに」の言葉をふまれば、本書で水を取り上げたのは、自然を水で換喩することで、自然を全体として把握するためです。地球研の基本理念の一つである「自然と人間の相互作用環の解明」を、「水」をその代表としてまとめたといってもよいでしょう。「人と水の関係史」、「水を利用する——水をあやつる知恵」、「生態系を巡回する水」、「見えない水をはかる」、「水はだれのものか」の5章からなる本書は、水を題材として、地球研の研究プロジェクトの成果と今後の目指すべき方向性を示しています。(谷口真人)

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2009年3月16日～5月15日開催分

開催日	タイトル	主催者 (プロジェクトリーダー/プログラム等)	開催場所
3月16日	第34回地球研セミナー "The Global Precipitation Climatology Centre (GPCC) - Rain gauge based precipitation analyses for the land areas of the Earth in support of climate research and water resources management"	地球研	地球研講演室
3月17日	チュクロバ大学 MOU締結記念セミナー	佐藤洋一郎	地球研セミナー室
3月23日	循環プログラムセミナー "Optimal Management of a Coastal Aquifer with Near-Shore Marine Ecological Interactions"	循環プログラム	地球研セミナー室
3月24日	プロジェクトセミナー 「ヒューマン・ネットワークを用いた危機への対処行動」	梅津千恵子	地球研講演室
3月24日	第23回「環境疾患」プロジェクト研究会 "Eco-cultural Health"	川端善一郎	地球研プロジェクト研究室
3月26日	第24回「環境疾患」プロジェクト研究会 「コイの耳石に刻まれた行動生態」	川端善一郎	地球研プロジェクト研究室
3月26日	第35回地球研セミナー「サステナビリティ学の創生」	地球研	地球研講演室
3月27日	環境意識プロジェクト 日本森林学会イブニングセミナー 「森林流域環境と人間社会のつながりの理解にむけて」	関野樹	京都大学総合人間学部
3月27日	第22回・第23回エコヘルス研究会	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
3月30日	第24回エコヘルス研究会	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
3月31日	多様性領域プログラムセミナー "Corridor of Renewable Energy and Economic Modernization: the Tragedy of the Environment"	多様性領域プログラム	地球研講演室
4月8日	ワークショップ "CyHV-3 disease in an environment-human linkage"	川端善一郎	地球研プロジェクト研究室
4月10日	佐藤プロジェクト セミナー 「イギリス湿地帯の植物考古学：農耕と環境に関する長期的考察」	佐藤洋一郎	地球研セミナー室
4月15日	第19回「人と自然：環境思想セミナー」 「素であること——生活の“寸法”」	佐藤洋一郎	地球研講演室
4月16日	第25回エコヘルス研究会	門司和彦	地球研セミナー室
4月18日	連続公開講座「ユーラシア農耕史——風土と農耕の醸成」講演「ユーラシアの風土と農業」	佐藤洋一郎	地球研講演室
4月25日	公開シンポジウム「地域住民との研究資源の情報共有化に向けた課題を考える——現地語とデジタル・メディアを中心として」	縄田浩志 日本ナイル・エチオピア学会	地球研講演室
4月25日	第1回メガ都市プロジェクト研究会	村松 伸	東京大学生産技術研究所
5月12日	第26回エコヘルス研究会	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
5月13日	第20回「人と自然：環境思想セミナー」 「うるわしの暮らし——穂竹屋との出会い」	佐藤洋一郎	地球研講演室
5月13日	第25回「環境疾患」プロジェクト研究会 「KHVおよび感染症のダイナミクス」	川端善一郎	地球研プロジェクト研究室
5月15日	第26回「環境疾患」プロジェクト研究会「水辺環境変化が引き起こす生態系変化とその修復：琵琶湖を事例として」	川端善一郎	地球研セミナー室
5月15日	第36回地球研セミナー「気候変動と野外遺跡の成立と保存——中国敦煌莫高窟の成立と気候変動」	地球研	地球研講演室

2009年度 新 FS・IS紹介

2009年度の FS(予備研究)と IS(インキュベーション研究)は、下記のとおり決定しました。

FS(Feasibility Study) 研究課題名	FS責任者	所属等
中央アジアにおける遊牧民と農民の環境史学	宇野隆夫	国際日本文化研究センター 研究部 教授
急激に変化する中国・長江流域の人間活動と自然の相互作用	田中広樹	名古屋大学地球水循環研究センター 研究機関研究員
東南アジア沿岸域における生物資源の持続的利用に向けた取り組み	石川智士	東海大学海洋学部 准教授
開発と環境、人口流動——変化への生活適応と環境影響	須田一弘	北海道大学文学部 教授
熱帯アジアにおける新興作物の急激な拡大による農業生態系の遺伝子汚染	佐藤雅志	東北大学大学院生命科学研究所 准教授
IS(Incubation Study) 研究課題名	IS提案者	所属等
東アジア・オセアニア地域における農業・牧畜活動の大気環境影響の研究——宇宙からの人間活動ウォッチング	林田佐智子	奈良女子大学理学部 教授
スラブ・ユーラシアにおける環境と公共性：広域的な水圏の比較研究	家田 修	北海道大学スラブ研究センター 教授
大洋州島嶼国の自然環境の多様性と人々の生活の多様性	木村英作	愛知医科大学 教授
熱帯地域における土地利用形態とガバナンスの違いがエコシステムサービスの劣化プロセスと頑強性に及ぼす影響	奥田敏統	広島大学大学院総合科学研究科 教授
生態系の劣化に適応する食・農リスク管理	嘉田良平	横浜国立大学大学院 環境情報研究科 教授
全球緑化：思考と実践	福井希一	大阪大学工学研究科 教授
近年の人為的要因に由来するアジアの昆虫相の変化とその生態リスク	荒谷邦雄	九州大学大学院比較社会文化研究院 准教授
サハラ以南アフリカ半乾燥地における砂漠化対処アプローチの構築	田中 樹	京都大学大学院地球環境学 准教授

招へい外国人の紹介

VLADIMIR, Aizen Borisovich
ウラディミール・アイゼン ボリソビッチ



- 所属プロジェクト
民族・国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明——中央ユーラシア半乾燥域の変遷
- 招へい期間 2009年4月3日～2010年3月30日
- 現職 アイダホ大学理学部地理学科 教授
- 専門分野 雪氷水文学、気候学

COIMBATORE RAMARAO, Ranganathan
コインバトゥ ラマラオ・ランガナサン



- 所属プロジェクト
社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス
- 招へい期間
2009年4月20日～7月19日
- 現職 タミルナドゥ農業大学物理科学・テクノロジー学部 教授
- 専門分野 数理モデル

WITZEL, Michael
ヴィツェル・ミハエル



- 所属プロジェクト
環境変化とインダス文明
- 招へい期間
2009年5月1日～8月31日
- 現職 ハーバード大学サンスクリット・インド学学部 教授
- 専門分野 インド学・神話学・言語学

研究活動の動向

世界水フォーラムに参加

2009年3月16日～22日〈トルコ/イスタンブール〉

トルコのイスタンブールにて第5回世界水フォーラムが開催されました。地球研は、日本パビリオンにブース出展したほか、トピック6.5「Water and Culture」の中で、セッション6.5.3 “Fostering Socio-cultural Perspectives in Water Sciences and Management: Identifying Bridges and Barriers” に参画しました。

「堀田ファイル」寄贈記念シンポジウム

2009年4月13日(月)〈地球研講演室〉

堀田満・西南日本植物情報研究所所長・鹿児島大学名誉教授が生涯をかけて集められた、有用植物に関する世界有数の「堀田ファイル」を地球研に寄贈いただきました。これを記念して、堀田先生を地球研にお招きし、シンポジウムを開催しました。

IHDP オープン・ミーティング

2009年4月26日～30日〈ドイツ/ボン〉

2009年4月26日から30日にかけて、ドイツのボンにて第7回 International Human Dimension Program (略称:IHDP) が開催されました。地球研からは、次の三つのセッションが立ち上げられました。

- 中尾正義・人間文化研究機構理事(元地球研教授)「乾燥地における水不足およびその他の環境問題に対する歴史的視点」
- 梅津千恵子・准教授「ザンビア農村地における社会生態システムの脆弱性と回復力」
- 地球研有志「自然・人文・社会科学の統合的知見：総合地球環境学研究所の経験」

※世界水フォーラムと IHDPの活動の成果は、21号(8月1日発行予定)で詳しく報告します。

イベントの報告



同志社小学校で 出前授業を実施しました

● 身近な環境の学習

報告 2009年4月17日(金)〈同志社小学校〉

地球研では、広い意味での社会に研究成果を発信することを目的に、学校教育を通じた広報活動も行なっています。今回は同志社小学校の6年生を対象に、「身近な環境の学習」と題して川と水辺の生き物についての出前授業を企画。講師の神松幸弘・地球研助教は、川の働きや構造から、川に住む生きものの話までをわかりやすく解説し、子どもたちの知識・興味を深めるきっかけとなりました。これを導入授業として、次回は実際に近隣の川に出かけて実習が行なわれる予定です。

人事異動

2009年3月31日付け

【辞職】

高相徳志郎(研究部 教授)

→琉球大学熱帯生物圏研究センター 教授へ

市川昌広(研究部 准教授)

→高知大学教育研究部 自然科学系農学部門准教授へ

鄭 麗軍(研究部 准教授)→同志社大学文化情報学部 教授へ

2009年4月1日付け

【採用】

村松 伸(研究部 教授)←東京大学生産技術研究所 教授より

NILES, Daniel Ely(研究推進戦略センター 助教)

【配置換え】

中野孝教(研究部 教授)→研究推進戦略センター 教授へ

【異動】

川満信男(管理部研究協力課長)

→琉球大学学術国際部研究協力課長へ

佐良俊久(管理部研究協力課長)

←神戸大学研究推進部連携推進課知的財産支援係長より

イベント情報

第33回 地球研市民セミナー

募集

世界の水、日本の水
——21世紀の日本の役割

2009年6月19日(金)18:30~20:00

〈ハートピア京都〉

21世紀は「水の世紀」とも呼ばれています。水は、生活や生産、そして環境にとって大きな役割や意味がありますが、世界では多くの人が洪水に命を脅かされ、また、安全な飲み水の確保に苦しんでいます。今回は、水問題への解決に向けて国内外で活躍されている竹村公太郎・日本水フォーラム事務局長・財団法人リバーフロント整備センター理事長をお招きし、世界と日本の水を巡る状況をお話しいたします。

●申し込み・問い合わせ先

地球研総務課企画室

Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106

e-mail: shimin-seminar@chikyu.ac.jp

第8回 地球研フォーラム

募集

よく生きるための環境
——エコヘルスをデザインする

Ecohealth Linking Human Well-being
and the Environment

2009年7月5日(日)13:30~17:00

〈国立京都国際会館 Room A〉

地球環境問題は、われわれ人類の長期的な「快適な生存」の問題ともいえます。健康はその重要な構成要素であり、それぞれが生活する環境とさまざまなかたちで関連しています。今回の地球研フォーラムでは、この健康と環境とのつながりを明らかにしたいと思います。日本だけでなく、東南アジア、モンゴルの草原、太平洋の島々、アフリカの人びとがどのように環境を保全して健康を維持・向上させているのか紹介し、「よく生きるための環境」とはなにか、を考えます。

●申し込み・問い合わせ先

地球研研究協力課

Tel: 075-707-2492 Fax: 075-707-2510

e-mail: forum@chikyu.ac.jp

編集後記

広報の重要性を再認識

今回の、『前略地球研殿』は中西名誉教授。久しぶりに地球研の花見のときにお会いし、その場で原稿を依頼した。桜の木に寄りかかって、すでに心地よさそうにされていた。快諾していただいたが、内容は優しくも厳しい。とくに地球研が「ほとんど知られていないのでないか」というのは耳が痛い。

終了したものから現行のものまで、プロジェクトは優れた成果を挙げている。知名度があがらないのは、広報の仕方がまずいのだろう。宣伝ではなく広報(Public Relations)。社会との関係をしっかり築き、研究活動を理解していただけるようにつとめたい。(阿部)

編集委員 ● 阿部健一(編集長) / 湯本貴和 / 木下鉄矢 / 神松幸弘 / 遠藤崇浩 / 鞍田 崇

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊

Humanity & Nature Newsletter No.20

ISSN 1880-8956

発行日 2009年6月1日

発行所 総合地球環境学研究所

〒603-8047

京都市北区上賀茂本山457番地の4

電話 075-707-2100(代表)

E-mail newsletter@chikyu.ac.jp

URL http://www.chikyu.ac.jp



編集 定期刊行物編集室

発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社

デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。